

司馬遼太郎が考えたこと 1～15 エッセイ 1953～1996 (新潮文庫) ◆◆◆◆◆◆◆◆



■この本は、司馬遼太郎さんがのこした仕事のうち、小説、戯曲、対談、てい談、座談会、講演等を除き、新聞、雑誌、週刊誌、単行本等に執筆した文章の初出掲載分を発行順に配列したものです。「街道がゆく」「ロシアについて」「風塵抄」「春灯雑記」他、同一主題をもって連載し、そのまま単行本にまとめられた作品は除きます。

■新聞記者時代、本名の「福田定一」さんでした。あるとき急に懸賞小説を書いてしまったから、筆名が必要になった。ちょうどそのころ「史記」を読んでいた。学生のころからこの書物が好きで、史記こそ世界最大の文学だと信じていたから、司馬遷の姓を借りることにし、名を「遼」としたそうです。

司馬ヨリモ遼（ハルカトオン）とシャレたつもりとのこと。ところで司馬遼では国籍をまちがわれると思い、「太郎」をつけたそうです。

■エッセイ：「人間の中のシルクロード」東のヒトと西のヒトが出遭った舞台として、古代シルクロードほど壮大で華麗なものはない。人間の心には、鳴るものがある。狩猟・採集の暮らしのころから持ちつづけてきたその楽器は、他の人間に出くわしたときに鳴弦する。本来、森の中で、不意に、自分とは髪の色や容貌がまったくちがった人間に遭遇したとき、まず恐怖があるだろう。恐怖は、かれらを闘わせるか、逃げさせるか、どちらかであるが、しかし互いに無害だと知ったときのよろこびは、原初以来、神があたえてくれたもつともすずやかなものかと思われる。この世にあるどうい物質も、これほどに澄明な美しさを持たない。森の中の遭遇者たちは、互いの容貌のちがいを手でさわってたしかめあい…すべてが、それぞれちがう。ちがうことが、いよいよ感動をふくれあがらせる。ふたりは歓声をあげるにちがいない。 「君のような人間がいたのか」

芸術のはじまりは、この一点に帰納されてしまう。「ちがう人間」というよろこびは、たとえば詩をつくりだした。そして踊り…やがて集落にもどってきたとき、みなの方に「自分が出遭ったのは、こういうヒトだった」と枯枝で地面に絵を描く。…集落には手のわざのきいた者がいて、持ち帰った物そっくり写しをつくって、やがて集落全体の文化として、だれもが持つようになる。工芸についてのよろこびがひろがる。人間の可憐さは、この原初の心を、いまなお落とさずに生きつづけていることです。(一部抜粋)

■小説：「梟(カウ)の城」…初長編小説で直木賞受賞。信長に一族を惨殺された怨念と忍者の生きがいをかけて豊臣秀吉をねらう伊賀者・葛籠重蔵と、伊賀を売り重蔵を捕まえることに出世の方途を求める風間五平。二人の伊賀者の対照的な生きざまを描く。戦国武家社会で、現代的な定義でいう職業・職能を持っていたのは伊賀者と呼ばれる忍者以外になかった。忍者モラルの中心は自身の職能・雇い主との契約。現代の職業社会に相似している。忍者によって新聞記者の司馬さん自身を書こうとしたという。

「国盗り物語」…美濃の斎藤道三。新しい秩序の創造者として歴史は信長という天才をむかえるわけだが、才能の出現には系譜がある。信長の先駆的人物として道三を書いた。過去の秩序を勇気をもって、しかも平然とやぶった悪人であり、悪人であるが故に近世を創造する最初の人になった。みごとな悪と創造性に富んだ悪はもはや美であることを、この作品によって読者に伝えたい。

「燃えよ剣」…新選組は近藤勇が首領であったが、事実上は土方歳三がつくり、強化し、史上最強の剣客団に仕立てあげた。組織を強化するためには友人をも殺し、組織だけが正義であると信じきった無類の天才。現代もどの職場にもいるのではないか。その企業目的が殺人であるかないかのちがい。それまでの日本人になかった組織というあたらしい感覚を持っていた男で、それを具体的に作品にしたのが新選組、天才的な組織づくり。悲劇的で喜劇的な男の典型という存在を書いた。

「城塞」…歴史を動かした大阪城・建造物が主人公。…「新史太閤記」「関ヶ原」「竜馬がゆく」

「坂の上の雲」「翔ぶが如く」「この国のかたち」…「司馬遼太郎全講演 1～5」…もあります。

■司馬遼太郎記念館： 自宅と隣接地に建てられた安藤忠雄氏設計の建物で構成。広さは約2300平方m。2001年11月に開館。数々の作品が生まれた自宅の書斎、四季の変化を見せる雑木林風の自宅の庭、高さ11メートル、地下1階から地上2階までの三層吹き抜けの壁面に、資料本や、自署本など約2万余冊が収納されている大書架、…一人の作家の精神を感じ取れる。(黒野晶大)

